

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	西口 文
論文担当者	主査 木村 卓
	副査 垣淵 正男
	副査 八木 秀司
学位論文名	Outcomes of Extraocular Muscle Surgery for Diplopia or Abnormal Head Posture After Treatment of Brain Disease (頭蓋内疾患治療後の複視と頭位異常に対する外眼筋手術の治療成績)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>重症な頭蓋内疾患治療後の眼合併症に、眼位異常による複視や頭位異常がある。申請者らは、この難治性と考えられている頭蓋内疾患治療後の複視や頭位異常に対し、積極的に外眼筋手術治療に取り組んできた。その眼位異常の特徴と治療成績について調査研究を行った。</p> <p>2006年3月から2018年2月に、脳血管障害（SCVD）群と脳腫瘍（BT）群の治療後の複視と頭位異常に対し当科で外眼筋手術を施行した64例（男性25例、女性39例、平均年齢53.6歳）を対象とした。背景、手術方法、手術回数、手術成績、満足度調査（NEI-VFQ25日本語版）につき比較検討した。</p> <p>SCVD群26例、BT群38例であった。複視消失率は手術単独でSCVD群46.2%、BT群57.9%、プリズム療法併用でそれぞれ80.0%、85.7%となった。頭位異常の改善はSCVD群81.0%、BT群81.8%であった。術後のNEI-VFQ25は56.3%で回答を得た。11項目中8項目（近見視力、遠方視力、社会的機能、メンタルヘルス、役割の制限、依存関係、色覚、周辺視野）でBT群はSCVD群より有意にスコアが高かった。</p> <p>頭蓋内疾患治療後、複視発症から外眼筋手術まで平均で約4年を要していた。複視消失率は両群とも8割を超え治療成績は良好であったが、SCVD群のNEI-VFQ25スコアはBT群よりも有意に低く、SCVDでは突発的な発症、疾患の受容困難などが関与していると考えられた。</p> <p>重症頭蓋内疾患治療後の複視や頭位異常に対する治療成績は、外眼筋手術に加え保存的治療としてのプリズム療法の併用が有効であった。積極的な外眼筋手術とプリズム療法の併用が治療に重要と考えられた。</p> <p>本研究は、難治性の眼位異常による複視や代償性の頭位異常に対する治療効果を示した点で、臨床的に極めて重要な研究であり、学位論文に値すると判断した。</p>	